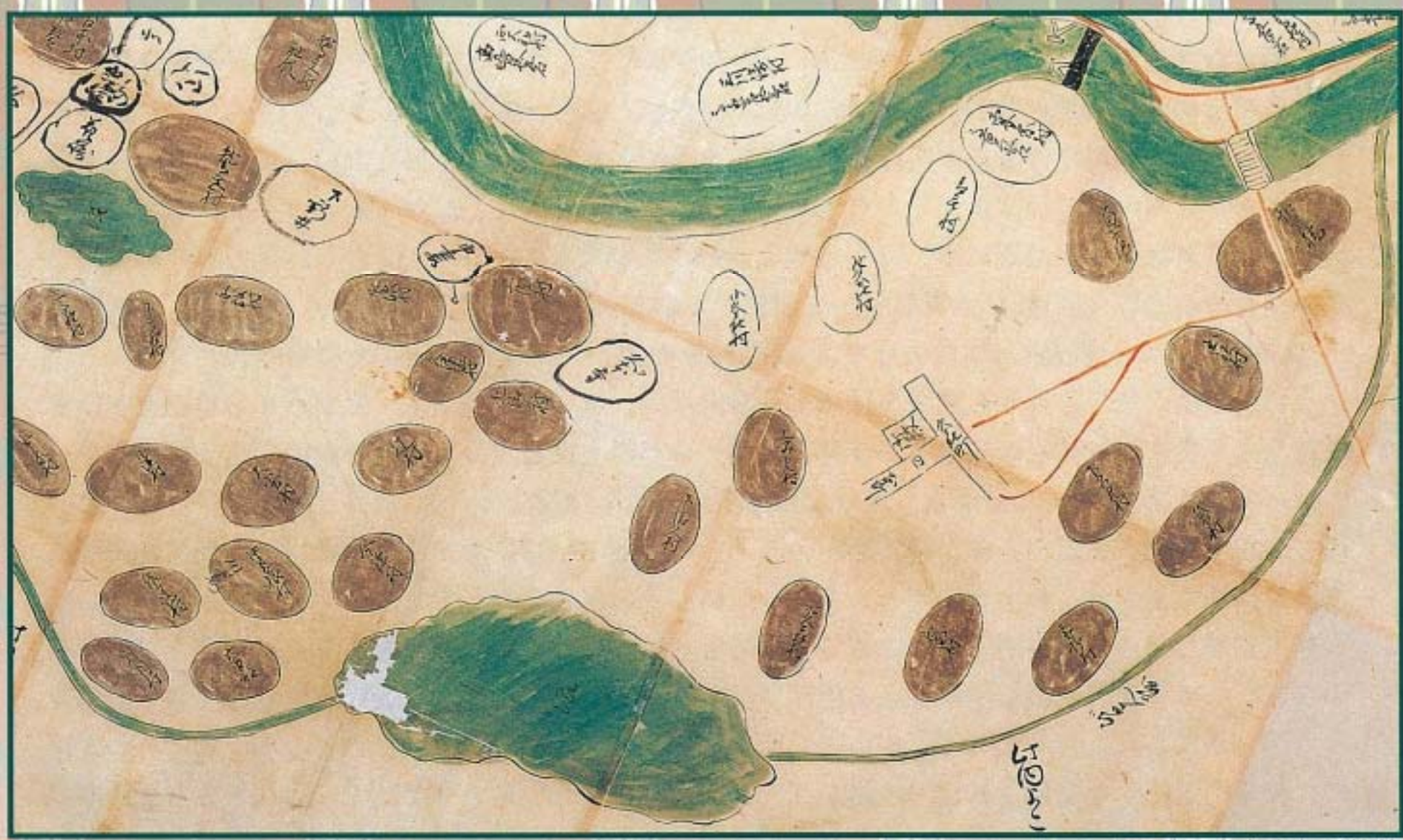


20　久喜御鷹場絵図　久喜付近抜粋

第９回企画展

久喜鷹場（くきたかば）

久喜市公文書館

平成10年８月18日㊋～９月27日㊐

（8月22日・29日、9月5日・12日・15日・19日・23日・26日は休館）

「久喜鷹場」を開催するにあたって

当館は、平成５年10月に開館して以来、「歴史資料として重要な公文書その他の記録」を保存し、これらを計画的に整理・公開していくことを主な業務としております。

この公開は、利用者の皆様が実際に生の資料を手にとって閲覧していただくことを原則としておりますが、その一方で公文書館をたくさんの市民の皆様にご利用いただくため、年２回の企画展を催し、公文書館資料を身近に感じてもらうよう努めています。

９回目を迎える今回は、「久喜鷹場」を開催することにいたしました。

「久喜鷹場」は、慶長６年（1601）に、伊達政宗が徳川家康から拝領した鷹場のことです。このように、家臣が徳川将軍から鷹場を拝領する事例は御三家（水戸・尾張・紀伊）も含めてその後も数例見られますが、政宗が拝領した「久喜鷹場」はその中でも際立って早いものです。鷹場の中心でもあった久喜の地には、「御殿」と呼ばれる宿泊可能な施設がありました。「久喜鷹場」は、その後も２代藩主忠宗へと引き継がれますが、弱冠２歳で藩主となった４代亀千代（後の綱村）の時に返上を余儀なくされ、わずか60年という短い期間でその存在を終えました。

徳川家康と伊達政宗が関係している「久喜鷹場」は、日本の政治史を考える上でも非常に興味深い存在なのですが、残念ながら現在まで残されている関係資料は非常に少なく、その実態となると全く明らかにされておりません。本市域に伝え残されている関係資料も今のところ皆無で、わずかに、御陣山遺跡から発掘された刀の鍔が江戸初期のものらしいというだけで、それさえも伊達家或いは仙台藩との関係は明らかとなってはおりません。

今回の展示では仙台市博物館所蔵の伊達家文書から、「久喜鷹場」関係資料を確認できる範囲で紹介することにいたしました。この展示を観覧された皆様のなかから、さらなる調査・研究が進められ、過去の歴史が少しでも明らかとなっていくことをご期待申し上げます。

最後になりますが、今回の展示を行うにあたりまして、ご協力をいただきました仙台市博物館ならびに関係者の皆様に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

平成10年８月

久喜市公文書館長

主な参考文献

本間清利『御鷹場』（㈱埼玉出版社、1981）
村上直・根崎光男『鷹場史料の読み方・調べ方』（雄山閣出版、1985）
根崎光男「江戸幕府鷹場制度の成立過程」（村上直編『幕藩制社会の展開と関東』所収、1986）
本間清利「武蔵東部低湿地の鷹狩と鷹場」（『多摩のあゆみ』51、1988）
斎藤　司「近世前期、関東における鷹場編成－拝領鷹場の検討を中心にして－」
（『関東近世史研究』32、1992）

Ⅰ　久喜鷹場の概要

久喜鷹場は、関ヶ原の戦いが終わった翌年の慶長６年（1601）に、伊達政宗が徳川家康から拝領した鷹場のことです。その後２代藩主忠宗へも引き継がれますが、寛文元年（1661）、当時２歳の４代藩主亀千代（後の綱村）の時に、藩主が幼いという理由で返上を余儀なくされます。その存在は、わずか60年という短い期間でした。

久喜鷹場の規模は、久喜を中心に100余村といわれ、貞享元年（1684）に作成された「御鷹場村数之覚」（資料No２参照）には、幸手領、百間領、岩槻領、騎西領・羽生領、久喜領という広範囲にわたって合計131の村名が記されています。わかりやすく現在の市町村別に編成して表記すると、下表のようになります。

また、御領所（ごりょうしょ）、古河領、館林領、久喜・騎西・忍領の４区分が色別に描かれている「久喜御鷹場絵図」（資料No１参照）では、久喜地域や「御殿」が南のはずれに描かれており、「久喜鷹場」の北側や西側の範囲が付箋によって示されています。

久喜鷹場を返上してから23年後（この年に久喜藩成立）に書かれた村名一覧

	明願寺村											
樋之口村	礼羽村											
原　村	馬内村											
除堀村	荒川村											
久喜新町	下ノ村	天神嶋村										
本町	志田見村	吉野村	遠野村	蒲茎村								
小久喜村	串作村	上戸村	佐左衛門新田	鴻茎村								
野久喜村	割目村	安戸村	并塚村	戸室村								
青毛村	今鉾村	平次賀村	藤搦村	中之目村								
栗原村	油井ヶ嶋村	志辺内村	蓮浪村	騎西町								
吉羽村	常泉村	弐本木村	下野村	根古屋村								
袋　村	小浜村	下谷村	原嶋村	牛重村								
下早見村	大室村	びるご村	大嶋村	日出安村								
青柳村	辻　村	長間村	下高野村	正能村								
江面村	水源村	中野村	杉戸町	戸崎村	須賀村							
所久喜村	下高柳村	平野村	清次村	道地村	道仏村	久本寺村						
二丁町村	神曽村	下吉羽村	蔵松村	田ケ谷村	蓮谷村	中妻村	野田村					
六万部村	久下村	和田村	堤根村	外田ヶ谷村	西原村	舟越村	爪田谷村	小渕村	川新井村			
中曽根村	花崎村	木立村	本郷村	西ノ谷村	中　村	鷲宮村	寺塚村	八町目村	台　村			
上清久村	篠崎村	上吉羽村	大塚村	上崎村	久米原村	栗原村	高岩村	柳原村	三ケ村			八山村
下清久村	大桑村	権現堂村	才場村	下崎村	和戸村	藤梅村	野牛村	ひろう村	早川野村			宮宿村
上早見村	川口村	幸手町	宮内新田	上高柳村	国納村	上内村	篠津村	新川村	戸ケ崎村	下新井村	上会下村	戸崎村
久喜市	**加須市**	**幸手市**	**杉戸町**	**騎西町**	**宮代町**	**鷲宮町**	**白岡町**	**春日部市**	**菖蒲町**	**大利根町**	**川里村**	**不　明**

Ⅱ　伊達政宗と久喜鷹場

伊達政宗（1567－1636）

永禄10年８月３日、米沢城で生まれる。

伊達輝宗の長男。

名は政宗。初名は梵天丸。通称は藤次郎。号は貞山。

初代仙台藩主。陸奥守。

寛永13年５月24日没。享年70歳。

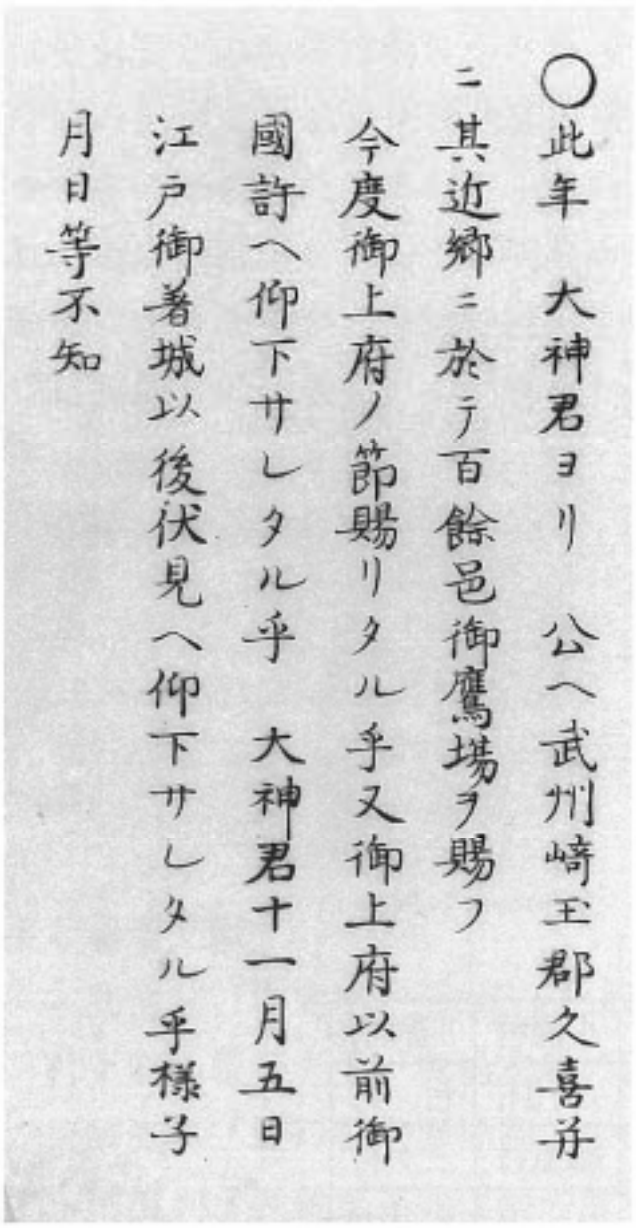
墓は仙台瑞鳳寺。

3　伊達政宗画像

政宗が鷹狩りを好んで行ったことは有名ですが、慶長16年（1611）を過ぎたころから、江戸や駿府への行き帰りに、あるいは参勤交代で江戸に居住している際に、度々久喜の地を訪れ鷹狩りを行ったことが記録に残されています。

伊達家当主の事跡を記した『伊達治家記録』には、政宗が少なくとも26回程度は久喜を訪れ、うち少なくとも10数回は確実に鷹狩りを行ったことが認められます。単純に計算してみても年１回～１．５回は、久喜の地を訪れていたことになります。滞在期間は様々で、短いのは１日、長いのになると１月程度、平均すると10日前後といったところでしょうか。

『政宗公名語集』という書物には、久喜の御殿のことを「日頃の御鷹場で、折々の御慰み所」であると記しています（資料No23参照）。残された書状等からも、政宗が久喜鷹場に行きたがっている様子が伝わってきます（資料No５・６参照）。


○此年　大神君ヨリ公ヘ武州崎玉郡久喜并
ニ其近郷ニ於テ百餘邑御鷹場ヲ賜フ
今度御上府ノ節賜リタル乎又御上府以前御
國許ヘ仰下サレタル乎　大神君十一月五日
江戸御著城以後伏見ヘ仰下サレタル乎様子
月日等不知

4　『貞山公治家記録』巻廿一
（慶長６年此年条）

大御所秀忠から初鷹狩りで得た真鶴の一段と大きいものをいただいたこと等を、領国にいる忠宗に知らせた書状です。

なお、追伸では、来る10日頃久喜鷹場へ行きたいことや各大名等から進上された鷹のうち大鷹２羽を大御所から拝領したこと等を述べています。

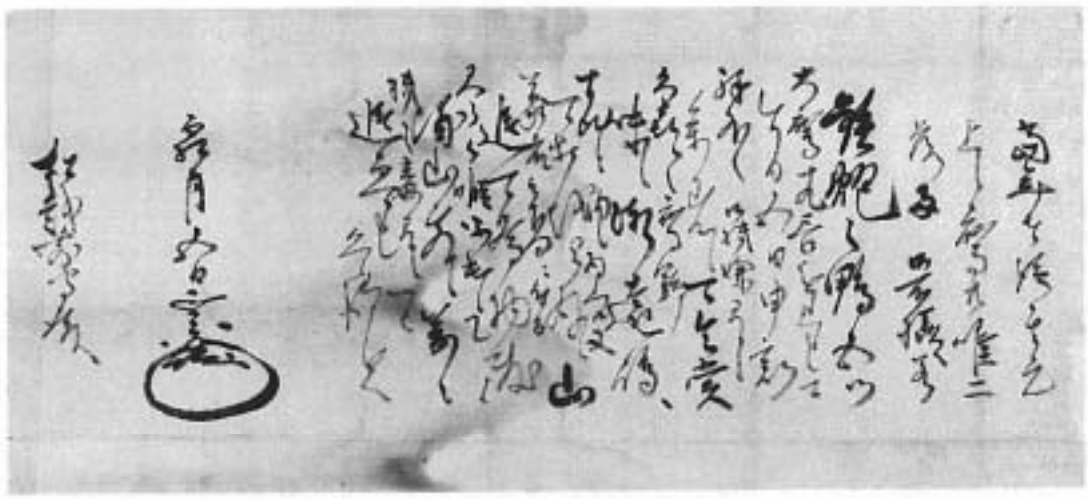
寛永２年（1625）10月25日の文書です。

5　伊達政宗書状（伊達政宗→伊達忠宗）

鴨５羽が本日５日に届いたのでおいしくいただきたいと、届けてくれた忠宗に宛てて述べたお礼の意味を込めた書状です。

なお、追伸では、久喜鷹場へ10日頃行きたいが、公家衆が京都から来るため許可がおりず残念だなどと述べています。

年不詳の11月５日の文書です。



6　伊達政宗書状（伊達政宗→伊達忠宗）

父政宗が鷹２羽を上様から拝領して、久喜鷹場へ出かけたそうであるが、それはまことにめでたいということを、忠宗が中島意成に宛てて述べた書状です。

なお、追伸では、将軍家の御馬御用として渥美九郎兵衛・加藤助三郎の両氏が到着したことを知らせています。

寛永11年（1634）11月21日の文書です。

7　伊達忠宗書状（伊達忠宗→中島意成）

中島意成　仙台藩奉行。通称監物。承応３年（1654）３月13日没。享年76歳。

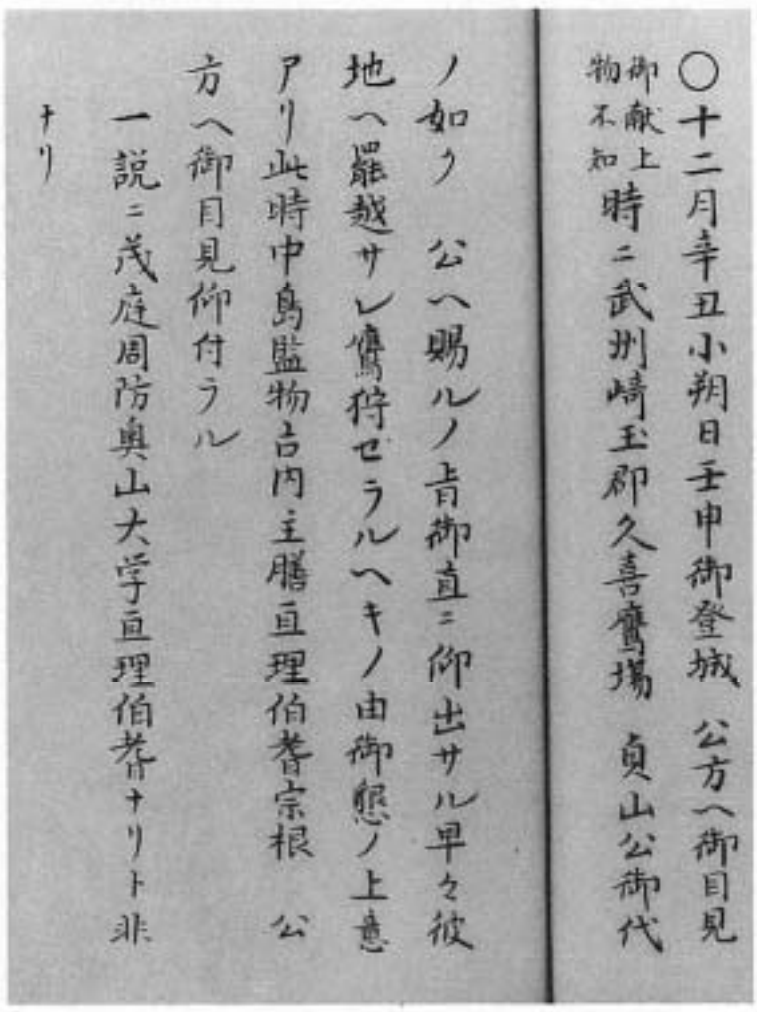
奉　行　仙台藩では他家の「家老」に相当する職を「奉行」と称しました。「国老」「執政」とも言います。
２代忠宗の代から奉行は６人と決まり、２人は江戸詰、４人は仙台詰、そのうち２人は在郷休息でした。

Ⅲ　伊達忠宗と久喜鷹場

伊達忠宗（1599－1658）

慶長４年12月８日、大阪で生まれる。
初代仙台藩主伊達政宗の次男。
名は忠宗。幼名は虎菊丸。通称は総次郎。号は義山。
２代仙台藩主。越前守。陸奥守。
明暦４年７月12日没。享年60歳。
墓は仙台瑞鳳寺。

8　伊達忠宗画像



○十二月辛丑小朔日壬申御登城　公方ヘ御目見
御献上物不知　時ニ武州崎玉郡久喜鷹場　貞山公御代
ノ如ク　公ヘ賜ルノ旨御直ニ仰出サル早々彼
地ヘ罷越サレ鷹狩セラルヘキノ由御懇ノ上意
アリ此時中島監物吉内主膳亘理伯耆宗根　公
方ヘ御目見仰付ラル
一説ニ茂庭周防奥山大学亘理伯耆ナリト非
ナリ

9　『義山公治家記録』巻一
（寛永13年12月辛丑小朔日壬申条）

政宗が没すると、その跡を継いだ忠宗も直ちに将軍から久喜鷹場を拝領します（資料No９・10参照）。忠宗も鷹狩りを好み、領内でも頻繁に行うとともに、政宗と同様久喜の地も度々訪れています。

『伊達治家記録』には、忠宗が少なくとも10回程度は久喜を訪れ、うち少なくとも７回は確実に鷹狩りを行ったことが認められます。

正保３年（1646）11月に忠宗が久喜の地を訪れたときには、久喜荒町で火事があり30軒ばかりが焼け、御鷹師矢吹作兵衛が焼死するという事件がありました（資料No11参照）。荒町は新町のことで、現在の愛宕通り近辺のことです。

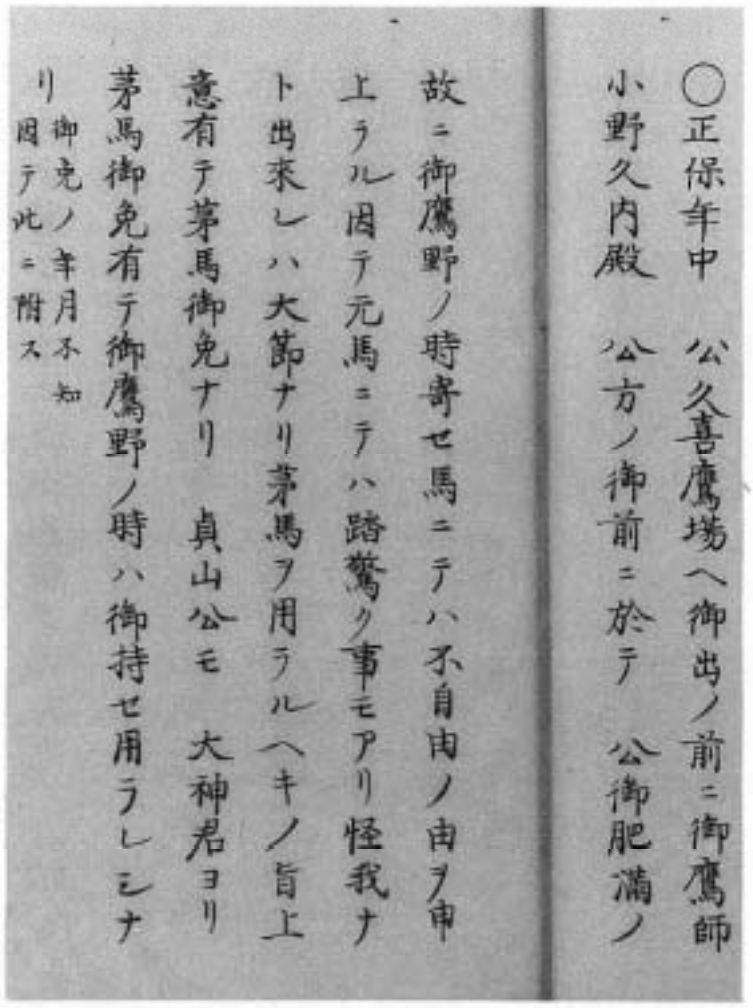
江戸詰の仙台藩奉行である古内重広と中島意成が、仙台詰の仙台藩奉行である石母田宗頼、茂庭良綱、津田頼康、奥山常良にあてて出した連署状の写しです。

12月１日に登城した折、将軍から久喜鷹場を故政宗公の時と同じように拝領して、その上早々に鷹も使ってよいとの仰せがあったことを伝え、その事を親類衆、一家・一族衆、宿老衆へ申し聞かせよとの殿（＝忠宗）の意向であることを述べたものです。

10　中島意成・古内重広連署状写

なお、追伸では、５日には久喜鷹場に御出かけになることも伝えています。

寛永13年（1636）12月２日の文書です。



○正保年中　公ノ久喜鷹場ヘ御出ノ前ニ御鷹師小野久内殿　公方ノ御前ニ於テ　公御肥満ノ故ニ御鷹野ノ時寄せ馬ニテハ不自由ノ由ヲ申上ラル因テ元馬ニテハ踏驚ク事モアリ怪我ナト出来レハ大節ナリ茅馬ヲ用ラルヘキノ旨上意有テ茅馬御免ナリ　貞山公モ　大神君ヨリ茅馬御免有テ御鷹野ノ時ハ御持セ用ラレシナリ（御免ノ年月不知因テ此ニ附ス）

正保年中（1644―1648）のこと、忠宗が久喜鷹場に向かう前に御鷹師小野久内が将軍に「忠宗殿は非常にお太りであるので、鷹狩りの際に寄せ馬（痩せ馬のことか？）では大変不自由しています。」と言いました。

そこで将軍は、「元馬（駻馬のことか？）では踏み驚くこともあり怪我などしたら大変ですから、茅馬（寶馬あるいは方馬のことか？）を用いたらいいでしょう。」とおっしゃり、茅馬をお認めになりました。

先君政宗公も、大神君家康殿から茅馬御免があって、鷹狩りの時にはいつもそれを用いていました。

12　『義山公治家記附録』六

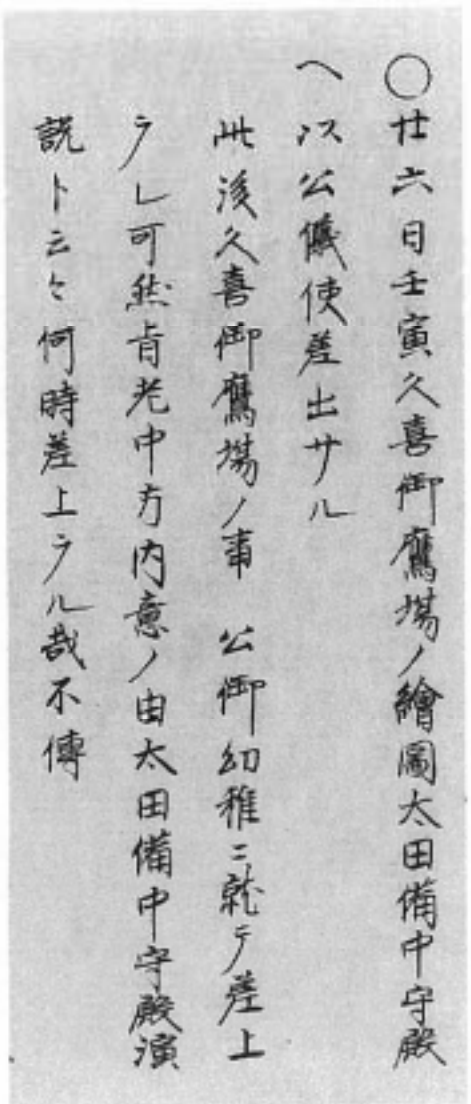
古内　重広　仙台藩奉行。通称主膳。万治元年（1658）７月12日忠宗公に殉死す。享年70歳。
石母田宗頼　仙台藩奉行。通称大膳。正保４年（1647）５月26日没。享年64歳。
茂庭　良綱　仙台藩奉行。通称周防。寛文３年（1663）８月２日没。享年85歳。
津田　頼康　仙台藩奉行。通称近江。明暦３年（1657）５月３日没。享年59歳。
奥山　常良　仙台藩奉行。通称大学。慶安２年（1649）８月９日没。享年66歳。

Ⅳ　久喜鷹場の返上

伊達綱村（1659―1719）

万治２年３月８日、江戸に生まれる。
３代仙台藩主伊達綱宗の長男。
名は、初め綱基、後に綱村。幼名は
亀千代、総次郎。号は肯山。
４代仙台藩主。
享保４年６月20日没。享年61歳。
墓は仙台大年寺。

13　伊達綱村画像

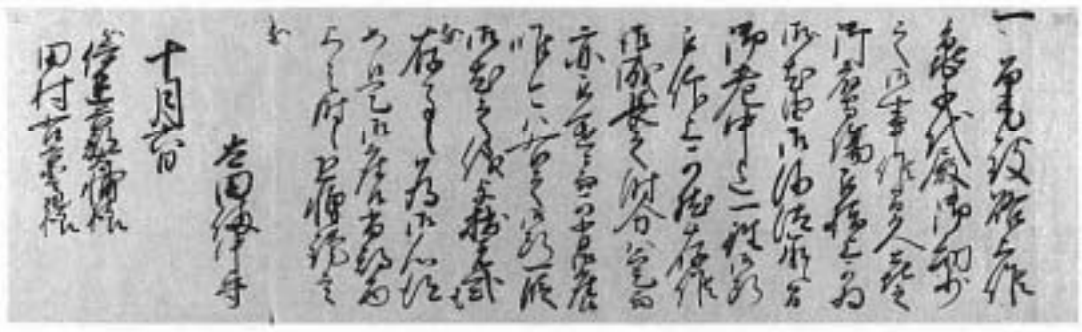


○廿六日壬寅久喜御鷹場ノ繪圖太田備中守殿
ヘ以公儀使差出サル
此後久喜御鷹場ノ事　公御幼稚ニ就テ差上
ラレ可然肯光中方内意ノ由太田備中守殿演
說トニテ何時差上ラル哉不傳

14　『肯山公治家記録』巻一
（寛文元年11月26日壬寅条）

伊達一門・仙台藩奉行等14人の連署願いを受けた幕府は、万治３年（1660）、３代藩主伊達綱宗に対し不行跡のかどで蟄居を命じ、その子である２歳の亀千代に家督を相続させました。同時に、伊達宗勝（政宗の10男）と田村宗良（忠宗の３男）の２人に、伊達62万石のうちから３万石を分地して一関と岩沼の支藩を立て、亀千代の後見を命じます。

翌寛文元年（1661）には、久喜鷹場を返上するよう幕府老中から内々に話があり、その関係で10月上旬に幕府側の太田資宗と仙台藩側の伊達宗勝・田村宗良との間で書状がやりとりされています（資料No15～19参照）。その後、11月26日には仙台藩側が幕府の内意を受け入れ、久喜鷹場の絵図を太田資宗に差し出し（資料No14参照）、12月１日に正式に久喜鷹場を返上したようです（『徳川実紀』参照）。



藩主亀千代が幼少なので、久喜鷹場を幕府へ差し上げよという沙汰があることを、伊達宗勝・田村宗良に伝えた書状です。

寛文元年（1661）10月6日の文書の写しです。

15　太田資宗書状写
（太田資宗→伊達宗勝・田村宗良）

亀千代幼少につき久喜鷹場を差し上げよとのことですが、亀千代殿が成人した後には再度拝領できるように老中までお願いして欲しいことを、太田資宗に伝えた書状です。

資料No15の返信で、同日に出された文書の写しです。

16　伊達宗勝・田村宗良連署状写
（伊達宗勝・田村宗良→太田資宗）

久喜鷹場は政宗公の頃より拝領していることでもあるので、仙台藩の意向を老中に話してみましょうということを、伊達宗勝・田村宗良に伝えた書状です。

資料No15・16の再返信で、同日に出された文書の写しです。

17　太田資宗書状写
（太田資宗→伊達宗勝・田村宗良）

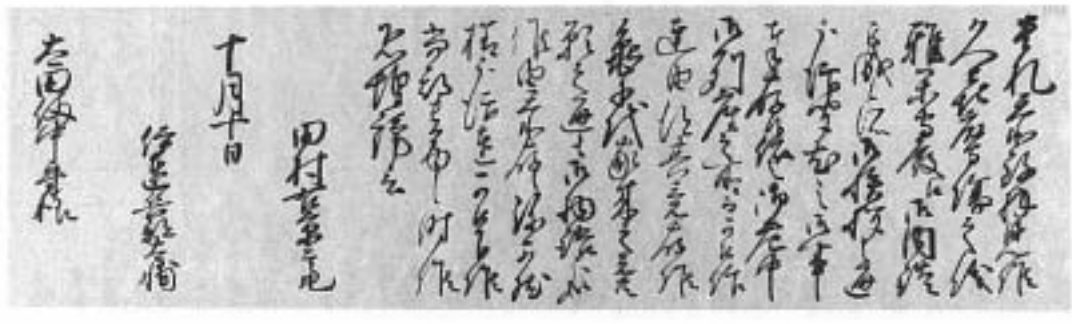
老中酒井忠清（さかいただきよ）殿に話してみたが、家来衆の気持ちはわかるが、亀千代幼少のためそれはならないとの返事で、近々老中列席のもと、久喜鷹場の返上についてお達（たっし）があるので心得ておいて欲しいということを、伊達宗勝・田村宗良に伝えた書状です。

寛文元年（1661）10月10日の文書の写しです。

18　太田資宗書状写
（太田資宗→伊達宗勝・田村宗良）

久喜鷹場返上のことで、老中酒井忠清殿にお話しくださるなど、いろいろお骨折りをいただいたことを、太田資宗に感謝しお礼を伝えた書状です。

資料No18の返信で、同日に出された文書の写しです。



19　伊達宗勝・田村宗良連署状写
（伊達宗勝・田村宗良→太田資宗）

Ⅴ　久喜鷹場こぼればなし

1　徳川家康と伊達政宗

あるとき、政宗が鷹場で鷹狩りをしていましたが、獲物が少なくついつい隣の御留場（幕府の禁猟区）に入って楽しんでいたところ、家康の姿を見かけたので、急いで鷹や獲物を隠して竹林の中に逃げ隠れました。一方、家康のほうも馬を早めて空堀へと身を潜めました。

後で政宗が家康にお目通りした際、その話しとなり、政宗のほうは家康殿を見たので竹林に隠れたのだと言えば、家康のほうも政宗の鷹場に入り込んでいたため、政宗が竹林にひそみ自分を逃してくれているのだと思い急いで身を潜めたのだと言いました。

さらに、お互いそうだとわかっていれば、そんなに急ぐこともなかったのにと家康が言うと、その場にいた一同大笑いしたということです。

2　父が教えた「御鷹場等の箇条書」

忠宗が初めて江戸を離れ、仙台に帰ることを許されたとき、政宗は忠宗に対して領国で鷹狩り等を行う際の注意点を、自筆で箇条書にして伝えました。

それによると、侍や奉公人の慮外な行為は厳重に糾明せよと命じているのに対し、百姓が勝手気ままなことをしても大目に見てやるようにしなさいと百姓への対応に気を配っています。また、領国にいる間は万事気遣いを止めて十分休息するようにとの配慮も記されています。

3　政宗の薨去

江戸において政宗公がお亡くなりになり、ご遺骸が仙台まで運ばれる途次、久喜の御殿に立ち寄られた時の様子です。

「その日の夕方、久喜の御殿に入りました。夕食の給仕は衣を纏った法師です。法師が読経すると、皆も声をあげ悲しみにくれました。夜もふけてきたので、皆、床についたのですが、眠ることができません。しかたがないので、在世中のことなどを語り合い、つきせぬ涙をながしながら夜が明けていきました。久喜の御殿を出立する際も、普段は何とも思わなかったのですが、これも別れの１つかと思うとなんとなく胸が痛みます。お鷹場ということもあって、ここではこのようなお指図があった、この場所では馬を止められた、あそこでは鷹をご覧になられた等と、思い出を口にしては、その場所場所で止まっては泣き、止まっては泣き、気付くと白河の関まで来ていました。」

4　久喜領地名考

久喜領に「ゆわむね」という土地があるかどうかということで、担当者が調べてみたが、「ゆわむね」というところはないという報告をした文書が残されています。作成年は不明ですが、その内容から、天和２年（1682）以降の程近い時期のものと思われます。

「ゆわむね」とは、寛永５年（1628）に久喜の地を訪れていた政宗が、高屋法橋快庵に詠んだ狂歌「イハム子ニ　花ノ庵トヲクリツル　此一枝ヲ　アフキコソスレ」にでてくる言葉です。

ちなみに、この時の快庵の返歌は「一枝ノ　花ノ色ソフ庵トテ　幾春キミヲ　アフキコソスレ」というものでした。

5　遠藤九郎兵衛高次

久喜鷹場の御殿に宿泊していた忠宗が、朝、顔を洗おうとしたところ、昨夜遅くまで酒を飲んでいた御手水番が誤って熱湯をかけてしまいました。忠宗は思わず脇差しに手をかけ切腹を申し付けようとしましたが、しばらく考えた上で熱湯に水をさし顔を洗い、御座の間へ戻って医者を呼び手当てをさせました。

それを聞いた仙台藩奉行古内重広もあわててかけつけ、殿の手をみて驚き、早速切腹を申し付けるべきだと言いました。忠宗も手打ちと考えていたのですが、ふと目をやると伏見に住んでいたころから朝も夕も側を離れず奉公してきたことを思い、不憫になって許してあげました。

御手水番の名前は遠藤九郎兵衛高次と言い、後に目付から名懸頭へと進み、禄も増して500石となり、忠宗が死去するとともに殉死いたしました。享年60歳でした。

展示資料一覧

Ⅰ　久喜鷹場の概要

1　久喜御鷹場絵図
2　久喜鷹場村数覚書

Ⅱ　伊達政宗と久喜鷹場

3　写真パネル　伊達政宗画像
4　写真パネル　『貞山公治家記録』巻廿一（慶長6年此年条）
5　伊達政宗書状
6　伊達政宗書状
7　伊達忠宗書状

Ⅲ　伊達忠宗と久喜鷹場

8　写真パネル　伊達忠宗画像
9　写真パネル　『義山公治家記録』巻一（寛永13年12月辛丑小朔日壬申条）
10　中島意成・古内重広連署状写
11　『義山公治家記録』巻五（正保3年11月16日戊午条）
12　写真パネル　『義山公治家記附録』六

Ⅳ　久喜鷹場の返上

13　写真パネル　伊達綱村画像
14　写真パネル　『肯山公治家記録』巻一（寛文元年11月26日壬寅条）
15　太田資宗書状写
16　写真パネル　伊達宗勝・田村宗良連署状写
17　写真パネル　太田資宗書状写
18　写真パネル　太田資宗書状写
19　写真パネル　伊達宗勝・田村宗良連署状写
20　写真パネル　久喜御鷹場絵図　久喜付近抜粋

Ⅴ　久喜鷹場こぼればなし

1　徳川家康と伊達政宗

21　パネル　『東照宮御実紀附録』巻二十四抜粋（家康政宗互犯鷹場条）

2　父が教えた「御鷹場等の箇条書」

22　伊達政宗御鷹場等の箇条書

3　政宗の薨去

23　パネル　『政宗公名語集』72抜粋（薨去、遺骸仙台に下る条）

4　久喜領地名考

24　久喜領地名考
25　『貞山公治家記録』巻三十四（寛永5年2月乙卯大中旬条）

5　遠藤九郎兵衛高次

26　『義山公治家記附録』十

この図録は、再生紙を使用しております。

1　久喜御鷹場絵図

公文書館利用案内

開館時間●9：00～17：00

休 館 日●土曜日、日曜日、国民の祝日、年末年始（企画展の期間中は、日曜日も開館します）

交通案内●JR宇都宮線・東武伊勢崎線　久喜駅西口下車徒歩17分（市役所西側）

発行：平成10年8月　編集：久喜市公文書館　〒346-8501 久喜市下早見85-1　☎0480-23-5010